インド留学記 その4

インドの学校事情

東方研究会専任研究員
立正大学講師 高橋堯英

デリー大学の学生、いや、インドの大学生に、「将来の夢は？」と尋ねてみて下さい。彼らのほとんどの口から、「IAS」という答えが返ってくるはずです。

「IAS」とは、例年一〇〇〇人程募集される国家公務員採用の為の上級職総合統一試験の俗称で、イギリス統治下の「インド文官制度」(ICS)を継承するものです。興味深い点は、この総合職試験の成績結果によって、行政官(Indian Administrative Service)、上級職警察官(Indian Police Service)、外交官(Indian Foreign Service)、その他、税務官、税関吏、インド国有鉄道管理官などに採用される点であります。これらの高級職のなかで、学生たちの憧れの的が先の行政官職で、彼らは、数年のうちに一地域の司法・行政権を有する行政長官(Magistrate)となったり、後に内務省などで重責を担う官僚となるのです。

この試験の準備は、まさに一年間のデスマッチ。手元にある一九八七年の報告書によりますと、気が遠くなるような猛暑の六月十四日に行われた一次試験に、学部を卒業した二一歳から

三三歳までの十四万九千六百三十一人が願書を提出し、書類選考や他の個人的諸事情のため、実際には八万三千四百三十一人が受験しています。英語／インドの諸言語・一般教養・専門科目から成るこの一次試験はマークシート方式で行われ、この試験で選抜された一万百四十七人が十一月に行われた本試験に挑戦する権利を得ました。主に一般教養と専門科目二科目の論述問題で競われるこの本試験には、九千三百人が受験し、その結果が三月二十四日に発表され、一千七百二十四人が四月十六日に行われた口頭試問に進む資格を手にしています。この報告書では、この年の実際の採用人数は明かされていませんが、そこに述べられていた前年度のケースでは八百五十五人が最終的に採用されております。

一九八〇年頃あった一次試験を行うという新制度の導入以前は、デリー大学の史学専攻科のカリキュラムが、そのまま、この選抜試験の歴史コースの科目と一致しておりました。ですから、五〇人ほどいた私のクラスメートも他聞に漏れず、ほとんどが、この試験合格を目指して学部の講義を受け、一年生の頃からトピック毎に二〇〇〇ワード位（レポート用紙五枚位）のエッセイを準備するという作業をしていました。学部の進級試験の準備が、即ち、この試験準備であったのです。

エッセイやノートの交換などの試験準備は、学生の出身地や出身校によるグループ単位で行われるのが常でした。特に、気が付いたことは、学生の間で、彼らの出身地が大きな意味を持っていたことでした。「あいつはビハリーだ（ビハール州出身者）。」「奴らはボング（ベンガル州出身者）だ。」「所詮あいつはオリヤー（オリッサ州出身者）だ。」「おい、サウジー（英語のsouthから派生させたスラングで南インド人の通

称)。」などという言葉をよく耳にしました。ノートの交換のみならず、日々の行動も大概がこのグループ単位。一言でいえば、「仲良しグループのみんなで、良い点とりましょう」といったような試験準備なのです。その反面、彼らは、無意識のうちにも、他のグループに対して対抗意識を強く抱いていたようです。

当時、私の学年では、特にラージャスターン州のジャイプル市出身者が優勢で、通称「ジャイプル・ギャング」なるものを構成していまし

た。修士コースの学生から学部の一年生までのラージャスターン州出身者二〇人くらいが、構内の喫茶店でテーブルを囲み、ワイワイガヤガヤ騒ぎながらお茶を飲んでいる様子は、何故か一種異様なものです。試験前には先輩から後輩にノートが渡されることもあったようです。運動部のクリケット部などは、このジャイプル・ギャングの巣窟のようなもので、正選手・補欠など、ほとんどを彼らが占めていました。

インド社会の問題点の一つであるリジョナリズム（地方中心主義）がキャンパスライフにも反映されていたのです。まさに、インド社会の縮図そのものです。私個人はと言いますと、最初はどのグループにも入れてもらえていなかったようです。しかし、一年くらいたって、各々のグループに一人二人は知合いが出来てくると、その知合いを通じて各グループの客分格のような扱いをされるようになりました。また、同時に私を媒介にいろんなグループが接近する、といったような現象が起こってきたのです。当時を思い出す度に、彼らが、外国人である私を融合作用を進める触媒として利用していたような気さえします。

「IAS」に話を戻しますが、彼らは、学部卒業までに集めた膨大な量のエッセイを暗記し、修士課程で修めた情報を加味して、与えられた三回のチャンスに将来を賭けるのです。行政官職に選抜されさえすれば、二十代前半の若者が地位と莫大な権力を手にすることが出来るだけに、そして家族の誇り、いや、一族の誇りとなりうるだけに、彼らは、一族の期待とプレッシャーを一身に受けていたようでした。私がそれに気が付いたのは、もう少し後になってからのことですが、何れ御紹介したいと思います。

（つづく）